

契約結婚のほずですが!?

カタン、と郵便受けの音がして、私は玄関を開けた。届いたばかりの封筒を手に取り、その薄さ  
にがくりと肩を落とす。

気が進まないまま、『朝香瑠依様』と自分の名前が印刷された封筒を開けると、現れたのは案の  
定お祈り通知——要するに、不採用のお知らせだった。

「これでもう、何十社目かしら……」

麗らかな春。私は、間近に迫った派遣契約の終了に頭を抱えていた。

今の会社から突然、派遣社員の次回更新なしを通告されてから三ヶ月。私を含めた派遣仲間は、  
せつせと次の仕事を探している。

私も派遣とは別に、履歴書を送ったり求人にエントリーしたりしているが、今のところ結果は全  
滅だった。派遣元のコーディネーターさんからも、いい連絡は来ていない。

高校を卒業後、都内の短大に進んだ私は、就活に失敗し派遣会社に登録した。これまで半年ずつ  
二社に勤め、三社目である今の会社には二年近く勤めている。あと一回か二回は契約を更新できる  
と思っただけに、更新なしの通告は結構ダメージが大きかった。

何とかしなきゃ。この際、コーディネーターさんに、職種問わずでお願いしてみよう。

というのも、間近に迫ったアパートの契約更新費用を除くと、今の私の貯金は三ヶ月分の生活費くらいしかないのだ。

「あー、もう……多少のことには目を瞑るから、仕事決まらないかなあ……」  
とはいえ、夜のお店は難しい。

自分の性格を考えたら、勤めたところで三日も経たずにクビになるのが目に見えている。

二十三歳なら年齢的には問題ないだろうけれど、私は見知らぬ男性と楽しい会話ができるほど器用ではなかった。

でも、いざとなったら、そんなことも言っていられないよね……

溜息まじりに、ノートパソコンを起動させると、手当たり次第に登録したサイトの一つから、『新着の求人がありました』みたいなメールが来ていた。

どうやら、保育士の資格が引つかかったらしい。取っついておいてよかった。

メールに記載されたアドレスをクリックすると、文章だけの地味なサイトが現れた。

そこに、私の目は釘づけになる。

急募。職種…子守り。

待遇…日給二万円、住み込み（三食付）。

期間…未定。※子供好きな方を希望します。

——子守りで日給二万？ しかも住み込みで、三食食事付!?

保険関係と期間未定というのが気になるが、これに採用されれば住居も含め、私の懸念は一気に解決する。

私は急いでサイトの一番下にあった応募フォームに挨拶文を入力し、指示に従い履歴書データを添付して送った。

どうか採用されますように！

「……ま、こんな超好案件、私が採用されるはずないけどね……」  
夢見るくらいはいいだろう。

そのあとともいくつかの求人に応募して、私はパソコンを閉じた。

翌朝。更衣室で着替えていると、ぽんと肩を叩かれた。

「おはよ、留依」

「おはよう、奈津美。……どう、仕事決まった？」

同じ派遣仲間の長谷川奈津美は、年が同じこともあって、すぐに仲良くなった相手だ。

彼女とのこのやりとりは、今月に入ってからはずでに定番と化している。

美人で明るい奈津美ですら、次の仕事には苦労しているらしい。

「全然。最悪もう、実家帰ろうかなって思ってる。農家だし、ご飯と寝るところには困らないから

ね。たまに、現金で報酬<sup>ほうごう</sup>くれるし」

「そっか。いいなあ」

更衣室で制服に着替えながら、お互いに溜息をつく。

「んー。でも実家が嫌で家を出たのに、結局戻るのがかって思わなくもないけどさ。背に腹は代えられないから」

奈津美は、心配そうに私を覗き込んできた。

「あんたは？ どっか決まりそう？」

「全然……昨日も来たよ、お祈り通知……」

「うわー……月曜からそれはキツイ」

「ほんと、どん底。契約終了まで、あと二週間しかないし……月内に決まってほしいよ」

「うん。あたしもギリギリまで粘る。けど……売り手市場って何なんだろうね……」

「本当にね……」

そんな風に互いに慰め合ったあと、夕飯を一緒にする約束をした。そして、それぞれのデスクに座り仕事を始める。

私達派遣の仕事は、基本、営業アシスタントだ。

取引先からの質問や注文を、担当の営業社員に転送したり、電話の応対をしたりする。

私は今日も、それなりに忙しく、いつもと変わらない日常を過ごした。

終業後、更衣室で着替えてスマホを見ると、奈津美から連絡が入っていた。急遽残業になってしまい、夕飯の約束はキャンセルしてほしいという内容だった。

私は、『了解、残業頑張つて』と返信する。仕事中は職場にスマホを持ち込めないから、奈津美がこれを見るのは残業後になるだろうけど。

一人で外食も淋しいし、近くのスーパーでタイムセールのお弁当でも買って帰ろう。そう考えながら更衣室を出ようとした時、バッグの中のスマホから着信音がした。

見知らぬ番号からの電話だが、求職活動中にそんなことを警戒してられない。

「はい」

素早く電話に出ると、柔和な老婦人の声がした。

『突然失礼いたします。こちらは、朝香留依様のお電話でよろしいでしょうか』

「はい、朝香です」

『わたくし、昨日ご応募いただきました家の者でございますが』

「昨日……？」

『はい。子守りの……』

「あ！ はい、確かに応募させていただきました」

まさか昨日の今日で電話が来るとは思っていなかった私は、急いでメモを取る準備をした。そんな私に、老婦人は申し訳なさそうな声で告げる。

『選考の結果、面接をさせていただこうと思うのですが……本日、お越しいただけますよ』

うか』

「今日……これからですか？」

現在の時刻は午後六時過ぎ。遅い時間ではないが、早くもない。

『はい。ご迷惑とは存じますが……』

「いえ、面接をしていただけるなら喜んでお伺いします」

何があってもいいように、履歴書の予備と職務経歴書は持ち歩いている。服は通勤用のややカジュアルなものだけど、急な面接ということで大目に見てもらおう。

『では、今から申し上げる住所までお越しくださいませ。乗り継ぎが不便ですから、タクシーをご利用ください。費用は往復共にこちらでお出しいたしますので』

老婦人が告げた住所は、ギリギリ関東に含まれる某避暑地だった。

私は急いで、オペレーターと上司に電話して明日の有休を確保する。

契約更新なしを告げられてから、急な有休申請でも大抵通るのがありがたい。奈津美にも一応、『面接が入ったから明日休むね』と連絡しておいた。

タクシーを飛ばして辿り着いた先は、高級別荘地の中でも確実に『特等地』だとわかる場所だった。

「着きました、が……」

運転手さんがどこか心配そうに私を見る。タクシー料金は六万円を超えていた。

幸いカード払いができるタクシーだったので、クレジットカードで払って領収証をもらう。

——が。

私は、目の前に建つ立派なお屋敷を見上げる。そう、これは屋敷だ。別荘とかいうレベルではない。こんな豪邸、現実に見るのは初めてだ。

……これ、新手の詐欺じゃない……よね？

今更怖気づくのも何だけど、そもそもあの求人内容は簡素すぎた。

雇用期間や保険関係はまったくわからなかったし、勤務地も書いてなかった。つまりこのお屋敷が勤務先という保証もない。

……電話の老婦人の声音は、優しげで品がよかったけど……その人も詐欺グループに雇われているだけというオチだったりしないわよね？

とはいえ、タクシーはもう帰ってしまっているから逃げようがない。何より、ここに来る為に使った交通費は回収したい。

目の前には高い塀と豪華な門扉。そこから微かに見える建物の屋根から、玄関までは少し距離がありそうだと推測する。

覚悟を決めた私は、深呼吸してモニターホンを押した。

『——はい、八雲でございます』

すぐに優しい声が応えた。

……電話の女性だ。私は少し安心して、名乗った。

「夜分に失礼いたします。朝香と申しますが、面接に伺いました」

『朝香様ですね、お待ちしております。——どうぞお入りください』

声とほぼ同時に、門が自動で開いていく。現れた景色に、私は息を呑んだ——予想よりずっと広い。

『玄関まで少し距離がございますが……』

申し訳ないが歩いてほしいと言われ、私はできるだけ丁寧に応諾した。ずっと座っていたから、体を動かせるのはむしろありがたい。

それから道なりに数分歩いて玄関に辿り着く。そこには、落ち着いた色合いの和服を着た上品な老婦人が待っていた。

「申し訳ございません、こんな時間になるとわかっていてお呼び立てしてしまい……」

「いえ。こちらこそ、ご連絡いただきありがとうございます」

ふんわりと微笑んだ老婦人に、私の不安や疑念が溶けていく。

……こんなにきれいに笑う人が詐欺を働くなんて思えない。何より、この品のよさは本物っぽい。

「申し遅れました。八雲家で坊ちやまの世話係を務めておりました相楽苑子と申します」

「朝香留依です」

苑子さんの後ろにいた若い女性が「お荷物を」と言ってくれたが、通勤用のバッグだけだったの  
で遠慮した。

「こちらにどうぞ。旦那様がお待ちです」

苑子さんに案内された先は、広くて豪華な応接室だった。私の住む1Kのアパートの部屋より遥かに広い。

シャンデリアの光に照らされた室内には、流行に左右されない上品なソファースセットが置かれている。

壁には精緻な彫刻で縁取られた大きな鏡があり、その下には暖炉。向かいにある壁龕には花瓶や  
絵画、ランプが飾られている。

まるで映画やドラマに出てきそうな、優雅な空間だった。

「旦那様。朝香様がお着きになりました」

ソファアに座った、五、六十歳ほどの男性が私に視線を向ける。

明らかにオーダーメイドとわかるスーツは、布自体が特別製なんじゃないかと思うくらい、『着る人を選ぶ』仕立てだ。それを洒脱に着こなす男性からは、何というか上流階級の香りがした。

「うん。苑子は残りなさい。——朝香さん、こんな遅くに申し訳ない」

「いいえ。面談の機会をいただき、ありがとうございます」

私が本心から言うと、男性はにっこり笑った。向かいのソファアを勧められたので、一言断って  
から腰を下ろす。沈みそうなくらいふかふかだけど、適度な反発もある。

「面接……といっても、あなたを採用することはほぼ決まっていますね。形式的な質問をいくつか  
せていただきます」

「はい」

私は、緊張しながら領いた。採用は内々定しているという。それなら、悪印象を持たれないように気をつけなければ。

「そうそう、先に交通費を。——これで足りるかな」

男性は目の前のテーブルに封筒を置いた。促されて中を確認すると、二十万円も入っている。……いや、さすがにこんなにはもらえないでしょう。

「領収証の金額以上はお受け取りできません」

そう言って、私は領収証を渡した。金額を見た男性は、首を傾げる。

「大差ないでしょう。差額は急な呼び出しのお詫びとしてお納めいただきました」

いや、大差ありますから！ 往復で十三万としても、差額は七万円。お詫びとしては大金すぎる。ですが……」

「それより、面接に入りましょうか」

強引に話題を進められ、私は不本意ながらも領いた。相手は雇用主になるかもしれない人だ。逆らうのはよろしくない。

「まず自己紹介しておこうかな。私は八雲将貴。——朝香さんは保育士の資格をお持ちだそうだが、実際に教えた経験は？」

「派遣で一度。産休の方の代理で、半年ほど経験しました」

私の答えに、八雲さんは小さく領いた。

「忍耐力は？」

「そこそこあると自負しています」

「うん、素直でいいね。では、最後の質問だ——今、交際相手はいるかな？」

八雲さんの瞳が真剣さを増した。

今の時代、セクハラと訴えられてもおかしくない質問だ。虚を衝かれた私は、内心うろたえる。

「——プライベートだと思えますが」

何とか平静を装って答えると、八雲さんは少しだけ申し訳なさそうに、だけど強い意思を宿した瞳で繰り返した。

「失礼は承知だ。だが、大切なことなのでね」

「……いけません」

正確には、恋人はいたことがない。私は、恋愛不感症というか、恋というものを知らなかった。私の簡潔な答えに、八雲さんは満足そうに頷く。

「よかった。長期の雇用になると、ここに恋人を呼んでしまう人がいるんだよ。それは困るからね」

そう言いながら、八雲さんが苑子さんに目配せした。苑子さんが頷いて補足する。

「——朝香様には、八雲家のご長男、千尋様のお世話係をお願いしたいのです。これまでは私が務めておりましたが、この年齢になりますと、腕白な坊ちゃまのお相手は……」

苑子さんが語尾を濁した。苑子さんは見たところ還暦くらいだけれど、子供、それも男の子の遊び相手は大変かもしれない。

「求人には、子守りとありましたが……、お世話係ですか？」

お世話係が必要となると、赤ちゃんか乳幼児のイメージだ。だけど、苑子さんの言った『腕白』<sup>わんぱく</sup>という言葉を加味すると、千尋坊ちゃまは幼稚園児くらいだろうか。

遅くにできた息子、もしくはお孫さんかもしれない。

「あなたには、あの子専属の世話係をお願いしたい。一人っ子で甘やかしてしまったせいか、少し我儘<sup>わがまま</sup>だね。一般常識や人との付き合い方も教えてやってもらえればと思っっている。もちろん、二十四時間あの子に付きつきりでは言わない。休日や勤務時間はできるだけ朝香さんの希望に沿うし、引き受けていただけれるなら、当初の日給ではなく月給で五十万円支払おう。……どうかな？」

「お受けいたします」

私が即、了承したのは、当然だろう。

月に五十万円ももらえるなら、どんな我儘坊<sup>わがまま</sup>ちゃまの子守りでも喜んでしてみせる。

詳しい契約については明日結ぶとして、八雲さんが客室に泊まっていくように勧めてくれた。

それは図々しいと思っ固辞したけど、苑子さんに「近くに宿泊施設はございませんし、明日、坊ちやまにご紹介いたしますから」と言われたので、ご厚意に甘えることにした。

そうして案内されたのは、温かみのあるブラウン系で統一された客室だった。家具は一通り揃っ  
ていて、バスルームも付いている。まるで、ホテルの一室みただ。

大きなベッドの上には、新品のナイトウェア一式が置かれていた。

——本当に、ホテル並みの心配りである。

その時、部屋のドアが軽くノックされた。

「はい」

ドアを開けると、苑子さんがサービスワゴンに載せた食事を持って来てくれた。

「お夜食程度のもですが、よろしければ」

「わ……ありがとうございます、夕食をどうしようかと思っていたんです」

食事をする時間もなくタクシーに飛び乗り、早敷時間。心身共に疲れているが、空腹なのも事実  
だった。喜ぶ私に、苑子さんは嬉しそうに微笑む。

「空いた食器は、そのままテーブルに置いておいてください。明日、片づけますので」

そう言っ、苑子さんは部屋のテーブルに食事をセッティングしてくれた。

夜食の定番、鍋焼きうどんだ。出汁<sup>だし</sup>の上品な香りが食欲をそそる。

……う、一気にお腹が空<sup>す</sup>いてきた。

「それでは、冷めないうちにどうぞ」

「はい。何から何まで……ありがとうございます」

苑子さんが一礼して出て行っったあと、私は早速夜食をいただくことにする。

コンビニ弁当に慣れた舌にもわかる、一流の味だ。

「おいしい、幸せ……」

食べ終わっったあと、食器はそのままにという言葉に甘えさせてもらっ、バスルームに入った。

黒大理石つぼい造りの広々としたバスタブに体を沈め、ゆっくり深呼吸する。  
じんわりと疲れが解れていく気がした。

——すごくいい条件の仕事だ。

八雲さんは少し強引だったけど、苑子さんは優しい。『我儘な坊ちゃま』が若干心配ではあるけれど、小さな子供は基本気まぐれで我儘なものだ。それに、そこが可愛いんだしね。

何より、月給があり得ないレベルだ。正直、多少のことならスルーできる。

雇用契約の時に、保険関係と雇用期間と禁止要項を確認して……と明日やることを整理した。教育係を兼ねるなら、本人に会ったあとと保育方針の計画を苑子さんに相談した方がいいかな。

そんなことを考えながら三十分ほどで入浴を終えた。

そして私は、翌朝六時にアラームをセットして、ベッドに入った途端——爆睡した。

……さすがに、仕事のあととタクシーで四時間移動し、面接を受けた私の体は、想像以上に疲れていたらしかった。

翌朝。

軽快なアラーム音で目覚めた私は、見慣れぬ高級感溢れる木目の天井に首を傾げる。

見慣れないのは当然だ、昨日初めて来たお屋敷なのだから。

……うん、久しぶりに、熟睡できたからか思考がすっきりしている。ここ数日、先行きの不安もあつて寝つきが悪かったからなあ……

私はバスルームに併設された洗面台で顔を洗い、身支度を整えた。

スマホを確認すると、奈津美から返信がきている。見ると『あたしも今日と明日は面接入ったから休むよー。お互い頑張ろ！』と、何とも明るく前向きな内容だった。

「よし、私も奈津美を見習わなきゃ」

坊ちやまとの面会に意欲を燃やしつつ、時間まで散歩でもさせてもらおうと部屋を出た。

広いお屋敷だけど、使用人は少ないらしく、誰に会うこともなく玄関に到着した。鍵が開いていたので、「失礼します」と誰ともなく断つて外に出た。

豊かな緑が広がる庭には、絶妙な配置で花や木が植えられている。

「ひろーい……」

明るいとこで見ると、このお屋敷は予想していたよりずっと敷地が広がった。

西洋風の庭には、なんとカスケード——階段状になっている滝まである。

遊歩道に従って歩いていくと、一際大きな木に辿り着いた。

「おお、この木がこのボス……」

太い幹は力強く、枝振りも見事だ。

溢れる生命力に感動しながら、大樹を見上げた時——上から人が降ってきた。

突然のことに言葉が失っていると、軽やかに降り立ったその人は葉っぱを払いながら私を見た。そして、艶やかな声で問いかけてくる。

「……誰だ？」

「あ、朝香瑠依……です。そちらは？」

すらりとした長身をダブルの高そうなスーツに包んだ、圧倒されるくらい端麗な容姿の青年だった。

「俺を知らない？ この家で？」

ここは『家』というレベルではない広さだけど、私は頷きながら理由を説明する。何となく、そうしなくてはいけないオーラがある。要は威圧感のある美形さんなのだ。

命じることが当たり前な、俺様な雰囲気醸し出している。

「はあ……昨日来たばかりなもので」

「……昨日？」

青年は、じっと私を見つめた。思わず「すみません」と謝りたくなるほど強い視線だった。そのタイミングで、苑子さんの声がする。

「――坊ちゃま！」

彼女は、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

――え、坊ちゃま？

「苑」

「また木に登られたのですね？ もうそんなお年ではないでしょうに」

小さな子供の悪戯を窺めるような、言い諭すような苑子さんの口調に、青年は肩をすくめた。

「景色がいいからな。心配するな。落ちたりしない」

「そういう問題ではございませんよ。苑にあまり心配をかけないでくださいませ」

「わかったわかった。――それで、苑……この人は？」

面倒くさそうに頷いた青年の視線が、再び私を見た。

……えっと、ちょっと待って、『坊ちゃま』って、まさかこの人が……？

「昨夜は早くにお休みでしたから、ご紹介がまだでしたわね。こちらは朝香瑠依様、坊ちゃまの子守りになられる方です」

「……苑。俺に子守りは必要ない」

「旦那様がお決めになったことです。坊ちゃまは、少しばかり――いえずいぶん、我儘でいらっしやいますから」

青年の抗議をパシッと拒絶して、苑子さんは私に向き直ってお辞儀した。

「おはようございます、朝香様。坊ちゃまが、何か失礼をしましたでしょうか」

「……いいえ。あの……苑子さん、坊ちゃま、って……」

「はい。八雲千尋様でございます。昨日お伝えしましたとおり、朝香様には、こちらの千尋様の子守りをお願いします」

……坊ちゃまって……どう見ても、目の前の男性は私より年上なのだが。

「子守り、と伺ったのですけれど……」

記憶を辿れば、確かに一人っ子の我儘な坊ちゃまの世話係兼子守りと教育係――と聞いただけで、年齢を確認していなかった。だけど、明らかに自分より年上の成人男性の『子守り』なんて、普通

ならあり得ない。一体何をどう世話して教育しろと言うのか。

「はい。旦那様にとつて坊ちやまはお子様ですから、子守りでございます」

「それは詭弁だ！」

「それは詭弁でしよう！」

——期せずして、千尋さんと私は同時に叫んでいた。

そして今、私は並べられた朝食に圧倒されている。

数種類の焼きたてのパンとポイルしたソーセージにオムレツ、サラダとスープとフルーツというホテルみたいな朝食は、素材の良さと調理技術の高さと食器の高級感が半端ない。

旦那様に相談してくるので、ひとまずご朝食を——と言って微笑んだ苑子さんは、私を朝食専用というこのダイニングルームに連れて来てくれた。

……ふわふわだわ、このオムレツ。フォークではなくスプーンで、と言われたのが納得のやわらかさだ。そうです私は現実逃避しています。

私の向かいに座っていらつしやる八雲千尋さんは、不機嫌なオーラを放ちつつも、苑子さんには逆らえないらしい。何も言わずに食事を進めている。

「——ご馳走さまでした。もういい」

きちんと食後の礼を述べて、給仕に片づけを促す。私もほとんど終わっていたので、一緒に下げてもらった。給仕をしていた人が退室して、広いダイニングルームは私と千尋さんの二人きりに

なってしまった。

「……………朝香、溜依さん？」

「はい」

「俺の子守りとして雇われたそうだが」

「……………小学生以下を想定していました」

「だろうな」

溜息まじりの千尋さんに、私は頷いた。お互いに、この『子守り』は『あり得ない』という感覚で一致しているらしい。

「あのクソ親父の考えそんなことだ。昨日、いきなり休暇を命じて俺をここに監禁したから、何か企んでいるとは思ったが」

セットしているわけではなさそうなのに、何だか色っぽく整っている髪をくしゃりと掻き上げて、千尋さんは苛立った声で呟いた。

「はあ」

さらつと言われたけど、父親が息子を監禁って、なかなかすごい家庭環境なんじゃ……

怪訝な顔をしたであろう私に、千尋さんは苦笑した。

「一ヶ月か二ヶ月、一つ屋根の下で過ごさせ、男と女の関係になったところ責任を取って結婚させろ——というのが親父の企みだろう」

「普通はそれ、女の人を使う方法じゃ…………？」

ドラマや小説では、既成事実から交際あるいは結婚を迫るのって、大抵は女の人の方だ。

「……前々から、結婚しろとうるさかったからな。痺れを切らして強硬手段に出たんだろう」

「なら、結婚なさればいいのでは……？」

「相手がいないのに結婚できるか」

「……ちなみにいくつですか？」

「二十七になった」

それなら、まだ結婚を急ぐ年齢ではないのでは。その思いは顔に出てしまったらしく、千尋さんが溜息を漏らした。

「うちの会社は世襲制だ。自分の子供と同じくらいの年の社長なんて、あまりいい印象を持たれない。だから、せめて結婚しろというのが親父の考えだ」

なるほど……と思うと同時に、疑問が浮かんだ。

「うちの会社？ それに社長って……」

「八雲グループって知ってるか？ その中核の八雲ホールディングスがうちの会社で、俺が社長だ」ちなみに親父は会長でグループの代表だと言われて、私は目を瞠った。

八雲グループは、誰もが知る超有名な企業グループだ。トップは由緒正しい血筋の経営者一族と言われ、資産額はどこの国の国家予算を凌ぐという、桁違いのセレブ様。

それが、目の前にいる美形さん——天は二物を与えずって、嘘だわ。

「まあ、そんなわけだから俺に子守りは必要ない。そちらから断りづらいなら、俺が追いついたこ

とにしておく」

「えっと、それは困ります」

確かに、『お世話係兼子守り兼教育係』の対象が立派な成人男性とわかった時点で、この求人は無効だ。けれど、今の私には仕事を選び好みしている余裕などない。まして、こんな破格の給料がもらえる仕事なんて、この先絶対にはいはずだ。

「……ここにいたら、俺と結婚させられるぞ？ 俺は親父の計画に乗るつもりはないが、親父は基本的に手段を選ばないからな」

八雲会長はどこの暴君ですか。とはいえ、私は千尋さんの言葉に、わかりましたと頷くこともできなかつた。

私には、とにかくお金が必要だったから。

「こちらにも事情があるんです」

隠しても仕方ないので、私は千尋さんに事情をかいつまんで説明した。

昨年、父方の祖母がくも膜下出血で倒れ、手術費と入院費で自分の貯金がほぼ消えたこと。それ自体は後悔していない。私を育ててくれたのは、共働きで多忙だった——そしてすれ違って離婚した両親ではなく、祖母と、今は亡き祖父だったから。

この先、祖母と自分の生活を考えたら、どうしたって先立つものが必要になる。けれど自分は派遣切りで今月末には無職になってしまうこと、求職活動は今のところ全滅で、ようやく決まった再就職先がここだったことを話した。

「父親を頼らなかつたのか？」

「ええ。両親はそれぞれ再婚してますし、そちらに子供もいますから……」

「……そうは言っても、自分の親だろう？」

「祖母が倒れた時、父に連絡しました。でも……『自分にも家族がある、そっちで何とかならないのか』と言われたので……」

あの時から、私にとって父は父でなくなつた。あの人の家族は、新しい妻とその子供だけなのだ。千尋さんは、ぬるくなつた食後のコーヒーを一気に飲み干して、私を見た。

「繰り返しですが、ここにいたら俺と結婚させられるぞ。現に俺は、親父に最低三ヶ月はここで静養しろと命じられている」

千尋さんはどう見ても健康そうだから、それが建前なのはわかる。

「千尋さんは、お父様に逆らえないんですか？」

「人事権を握つたままの会長、まして筆頭株主に逆らせる社長がいるか？ おまけに、ここは親父の城だからな。苑をはじめ、使用人は全員親父の味方だ」

千尋さんは、素直に閉じ込められるタイプには見えないんだけど。

「親父はやりたいことは絶対にやる。仕事はともかく、プライベートで思いどおりにしなかつたことは一度もない」

思いどおりにならなかつたではなく、しなかつたというあたりに、八雲会長の性格が窺<sup>うかが</sup>える。

「今回ばかりは、何が何でも俺を結婚させる気だ」

なるほど。千尋さんは素直に閉じ込められているというより、逃げても無駄だと思つていなのか。

「だからって、どうして相手が私なんですか？ 普通にお見合いさせればいいと思うんですけど」

私がそう言うと、千尋さんは遠い目をして首を横に振つた。

「……親父は、政略結婚が嫌いだ。恋愛結婚でないと認めない自称ロマンティストだ」

「めちゃくちゃ迷惑な話ですね」

「心底そう思う。自分でやれと言いたい。俺の母はもう死んでるしな」

頷きながら私を見て、千尋さんがニヤリと笑つた。

「親父の後妻を狙うか？ 少なくとも金には困らないぞ」

「セクハラですか。お説教していいですか？」

正式な契約は結んでいないものの、私の雇用主は八雲会長であり、千尋さんは子守りの対象だ。一般常識がないと苑子さんも言っていたし、やっぱり躰<sup>しっけ</sup>は大事だと思う。

そんな私をじつと見つめた千尋さんは、しばし何かを考<sup>かんが</sup>えるようにし——驚きの提案をしてきた。

「朝香瑠依。俺と結婚しないか？」

「あなた何言つてるんですか熱でもあるんですか諦めてどつか壊れたんですか」

思わず一息に返した私に、彼は怒るでもなくビジネスライクな言葉が続けた。

「お互いの現状問題だ。俺は一刻も早く仕事に戻りたい。そっちは金の為に仕事かしたい。——手っ取り早くその両方を叶えるには、俺達が結婚すればいい」

「……はい？」

「親父は、俺が結婚すると言うまで絶対にここから出さない。そろそろ孫の顔が見たいからって理由で、息子を監禁することに何の疑問も持たないからな。俺が折れなきゃ、最悪、年単位でこのままだ」

「それはお気の毒ですが……」

考え方を変えれば、その間私は仕事を確保できるので、心からの同情はできない。

「俺の子守りの募集サイトを見た。あんな怪しいサイトに履歴書、しかも写真添付のやつを送るなんて、そつちもずいぶん切羽詰まってるんだろ」

痛いところを鋭く抉られた。

確かに……いくら条件がよくても、あの募集サイトに迷うことなく履歴書を送ってしまったのは、危機管理能力が欠如していたと言わざるを得ない。

それこそ、ネットの掲示板に住所氏名電話番号を書き込んだレベルでヤバイ。

「……否定はしません」

「だから結婚でどうだ？ 今後の生活は保障するし、ばーさまの入院費その他も俺が払う」

私の危機管理について指摘しておきながら、こんな提案をしてくる千尋さんがわからない。

「どうして私なんですか？」

「親父と苑のチェックを通る女を今から探すのは面倒くさい」

「あなたならすぐ見つかるでしょう？」

「親父は知らないが、苑が認める女は今までいなかった」

そう言って彼は、肩をすくめて私を見つめた。

「俺はたとえ親父の企みに乗った形になっても、仕事に戻りたい。そつちだって、給料が他よりいいってだけで怪しげな求人に申し込むくらい、焦ってるんだろ？」

美形は人と目を合わせることに躊躇いがないな！ そんなにじつと見られると居心地が悪い。

「お互いの現状と目的を考えたら、結婚は悪くない手段だと思うが……俺と結婚するのに困る理由があるのか？」

嫌な理由ではなく、困る理由と聞かれると、私も答えに窮するわけ。

すぐに答えの出せない私に、千尋さんは更に追い打ちをかけてきた。

「なら、そつちに好きな男がきたら、即離婚する。それでどうだ？ 要するに契約結婚だ」

「契約で結婚なんかできません」

咄嗟に反論してしまう。だけど——

「結婚なんか紙切れ一枚のことだ、別に大したことじゃない」

千尋さんは何でもないことのように——本当にどうでもよきそうに言って席を立った。

「——半日やるからどうするか決めろ。こちらとしても、嫌なら無理強いはしない。ただその場合、親父が何を言っても、子守りは断らせてもらう」

ひらひらと手を振ると、千尋さんはダイニングルームを出ていった。

頭を抱える私を残して。

私は客間に戻って、今後について考える。

子守りの仕事が、何故結婚という話になったのかまったくわからない。でも、千尋さんは「結婚しないなら仕事もナシ」と言った。

会ったばかりだけど、宣言した以上、彼は絶対にそうする気がする。何とか、八雲会長とそっくりだと思った。

先立つものがないと生きていけないのは、十分すぎるくらいわかっている。かといって契約で結婚なんて常識的に考えても、簡単に頷けることじゃない。

どうしようかと何気なくスマホを手を取った時、着信履歴に気づいた。

見ると祖母の入院先のソーシャルワーカーさんからだ。

すぐに折り返し、しばらく話したあと——私の腹は決まった。

そして、半日やると言った千尋さんを探す為、部屋の外に出る。

たぶんここだろうと当たりをつけて行くと、思ったとおりの長身の人影が見えた。

最初に出会った大きな木に凭れかかって、千尋さんは本を読んでいた。

ジャケットを脱いだベスト姿で、グレーのネクタイを緩く締めている。スーツでないと落ち着かないタイプなのかしら。

千尋さんは私の気配を察して、顔を上げた。黒曜石みたいにきれいな瞳が、私を見つめる。

「結論は出たのか？」

「はい。お受けします」

「そっちの条件は？ 俺の方は、親父が満足するまで、『妻』として振る舞ってくれればいい」

千尋さんは本当に仕事の内容を話すような口調だった。愛も恋もないけれど、それは私も同じ。

恋愛不感症の私には、この契約はちよーどいいのかもしれない。

「祖母を、信頼できる介護施設に入れてほしいんです」

「ばーさま？ 入院中じゃなかったか？」

「今はリハビリ病棟に入院してるんですけど、そろそろ退院しなきゃいけないらしくて。……でも、もとの家や私のところでは十分な世話ができないし、すぐに入れる施設も見つからないんです。——お金があれば別ですが」

そう言った私を、千尋さんはじつと見つめた。射抜くような視線を、今は真っ直ぐ受け止められる。——祖母の為なら、私は何でもする。

「ばーさまの為に俺と結婚するのか？ 契約で結婚なんかできないって言ったのに」

「——私にとって、家族は、祖母だけなんです」

だから大切にしたい。祖母の為に私にできることがあるなら、迷わない。

「……結婚したら、家に引き取るか？ 在宅介護の看護師や介護士を用意するが」

「お気持ちはありがたいですけど、一緒にいたら祖母に契約結婚だとバレそうなので」

私が首を横に振ると、千尋さんはそれもそうかと頷いた。

「うちの系列の施設ならすぐに入れる。医師と看護師と療法士が二十四時間対応できる、専属の介護士付きの施設でいいか？ 食事も体調や持病に応じて用意されていたはずだ」

私は千尋さんに頭を下げた。ここまで誰かに感謝したのは——祖母の手術を成功させてくれた先生以来だ。

「——他に条件がないなら、これで契約成立ということでもいいか？」

「はい。ありがとうございます」

「礼を言うことじゃない。これは対等な契約だからな」

それでも、私に選択肢をくれた千尋さんに感謝するのは、当たり前だと思う。

「次はこちらの条件を果たしてもらおう。親父に結婚の報告をして、婚姻届を出しに行く」

「結婚しましたという報告だけじゃ駄目なんですか？」

「駄目だな。親父は確実に戸籍を調べる。だからきちんと婚姻届を出して、夫婦として一緒に暮らしてもらおう」

どこまで徹底しているんだろう、八雲会長は。

「わかりました」

私は事務的に答え、千尋さんも頷いた。お互いに『夫婦としての実生活』がどこまでを指すか——具体的には夜のことが、避けている。

「ただ、私にも都合があります。退職手続きやアパートの管理会社に退去の連絡をしなきゃいけませんし、祖母に結婚することを話したいので、すぐに結婚というわけには……」

祖母は退院後、いきなり介護ホームへの入居だなんて急展開すぎるだろう。会社の方は有休消化でそのまま退職できると思うけど、派遣会社には今後の相談をする必要がある。

「そんなに面倒くさいのか？」

「退職は問題ないと思いますが、アパートは更新するつもりだったので予定外ですし、姓が変わると手続きも複雑になるかもしれないので。派遣のコーディネーターさんには、次の仕事の条件が変わることを言わなきゃいけませんから」

「は？ 仕事を続けるつもりか？」

千尋さんは、面妖めんようなモノを見るような目を向けてきた。

「もちろん、続けますよ？」

「おまえは俺の妻になるんだぞ。そんな暇はない」

さりげなく『おまえ』呼びになったのは、契約結婚を受け入れたからだろうか。

「そう言われても……私、あまり貯金がないので、働かないと生活ができません」

私の説明に、千尋さんは難しい顔をした。

「結婚後は、パーティーや接待に付き合ってもらうことになる。仕事は無理だ」

パーティーなんて出たことはないけれど、契約結婚する以上、ほぼ義務だろうことはわかる。

「パーティーというのは、どのくらいの頻度ひんどで……？」

「規模を問わないならほぼ毎週だが、そこまで求める気はない。どうしても外せないものだけ出てくれれば、あとは専業主婦として自由にしてい」

それなら、空いた時間あに働いてもいいのではないかと言った私に、千尋さんは首を横に振った。

「駄目だ。八雲の妻が働いているなんて知れたら、色々うるさい輩やからがいる」

でも、そうになると……私は、この契約が終わったあと、自分の生活費や祖母の施設費用を賄うだけ稼ぐ自信がない。

その不安を見抜いたのか、千尋さんはあっさりと妥協案を提案した。

「離婚の時は、おまえの有責でも慰謝料を払う。それとは別に俺の個人財産を半分渡すつもりだから、贅沢さえしなければ十分暮らしていけるはずだ」

「千尋さんの個人財産は夫婦の共有財産じゃありませんから、いただくわけにはいきません」  
すぐ魅力的なお話だけれど、平然とそれを受け取るほど私は恥知らずではないつもりだ。

すると、千尋さんは少し考え込んで——別案を提示してきた。

「なら、離婚して朝香姓に戻ったら、うちの会社に正社員で採用する。その代わり、八雲姓でいる間は俺の妻としての務めを最優先する。給料も払う。それでどうだ？」

自分にかなり都合がよすぎるような気がしないでもないが、正社員雇用は何よりありがたいので、遠慮せず頷いた。夢も何もない結婚ではあるが、今の私には必要なことだ。

「お言葉に甘えさせていただきます。でも、結婚している間はお給料はいりません。祖母の施設費用で十分です」

「契約には対価が必要だろう」

「ああ……生活費は確かに必要ですね。でも、貯金を切り崩して何とかします」

アパートの契約更新をしなくていいなら、まだ少し貯蓄がある。遣り繰り次第では一年くらいはもつ……かな？ それ以上『契約』が続くなら、その時改めて相談しよう。

千尋さんは、秀麗な顔に呆れた表情を浮かべた。

「生活費は俺が出す。結婚する以上、夫が妻を扶養するのは当然のことだ」

契約結婚しろなんて常識外れなことを言う人に、こいつ常識は大丈夫か？ という顔で見られるのは心外だ。

「あの、それならせめて食費くらいは出させて——」

「そうなったら、俺はおまえに調理代を払うことになるな？ 毎回いちいち経費を確認して、領収書を切り合う生活か？ 面倒すぎるだろう」

千尋さんの言葉には一理ある。確かにそんな生活は御免こうむりたい。

「わかりました。では、掃除洗濯その他を頑張ります」

「ハウスキーパーを頼んでいるから必要ない」

「私、専業主婦になるんですよね？」

「……まあ、料理は作ってもらえると助かる」

それだけでいいのか。手料理に飢えている、というお約束展開なのか。

「先に断っておきますが、私の料理は十人並みですから。インスタントも使いますから」

「別に、美味ければそれでいい。家庭料理は、苑の料理で慣れてるしな」

あなたの『おいしい』の基準がわからないんですが。しかも苑子さんの料理……ハードルが高そうだ。

むう、と少し困った私を、千尋さんは物言いたげに眺めている。

「……何ですか？」

「いや……おまえ、他には何もいいのか？」

「他にとは？」

質問の意図を測りかねて問い返すと、千尋さんは何とも言えない顔になった。

「どんな家に住みたいとか、指輪はこのブランドがいいとか、新婚旅行はどこに行きたいとか」

「契約上、千尋さんのお家に居候させていただきますが、指輪や新婚旅行はいりません」

だって、私達の結婚は契約だ。結婚の証である指輪や、旅行は必要ない。

「それに一番欲しいものは千尋さんがくれましたから」

「……欲のない女だな」

千尋さんは呆れたように言うけれど、足を踏んで大切だと思ふ。

私は、人並みの生活ができればそれでいい。

「そんなことより、本当に結婚の許可が出るんでしょうか？」

「出る。親父も苑もおまえのことを気に入ったから、俺の子守りとして採用したんだ」

今ひとつ納得できないでいる私に、千尋さんは自信ありげに笑った。

それからすぐに、私は千尋さんに連れられて八雲会長のお部屋に行くことになった。

会長のプライベートルームは、お屋敷と渡り廊下で繋がった別棟にあるそうだ。

通されたのは昨日の洋風の応接室とは違って、三十畳ほどの和室だった。飴色の座卓や床の間の

調った部屋に、八雲会長は胡坐をかいてゆったりと座っていた。

開け放たれた濡れ縁から見える座観式庭園には、梅や桃が咲いていて春の息吹を感じさせる。

部屋には、ちようどお茶を届けに来たらしい苑子さんもいた。

「親父。瑠依と結婚するからここから出せ」

突然名前を呼び捨てにされ、私は一瞬戸惑った。

男の人に呼び捨てにされた経験は父以外は記憶にない。だけど、千尋さんが口にした響きほどにか優しくて——嫌な気持ちはしなかった。

「千尋。そこは『お父さん、結婚したい女性がいいます』と紹介するのが筋だろう」

「おとーさま、結婚したい女性がいるので紹介します」

棒読みで返した千尋さんに、八雲会長は満足そうだ。その後ろに控えた苑子さんも、嬉しげに微笑んでいる。……本当に、こんな適当でいいのかしら……

「瑠依さん、本当にこの息子でいいのかね」

「……優しい人だと、思います」

私は、ほとんど皆無とわかっていい千尋さん情報から、何とか答えを捻り出す。

その瞬間、会長が目を瞑った。

「……瑠依さんは、千尋に何か脅されたりしているのかな」

千尋さんの父親への評価もひどかったけど、ここまで息子を信用しない父親というのもどうなんだろう……仲が悪いわけではなさそうだけだ。

「どうして、今朝会ったばかりの相手を脅迫する必要があるんだ」

「今朝会ったばかりの相手と結婚するのもおかしいだろう？」

「俺の一目惚れ。運命でも宿命でもいいが、とにかく瑠依と結婚したい。——お望みどおりの恋愛結婚だろう、おとーさま？」

挑むような千尋さんの言葉に隣で聞いている私はハラハラする。

そんな挑発するみたいなこと言って、契約結婚だとバレたらどうするつもりなんだ。

「無論、結婚は構わない。おまえと瑠依さんの自由だ。ただし、千尋」

「何だ」

「偽装夫婦では困るぞ」

ずばりと言われて、私は表情を動かさないよう、心を無にした。千尋さんはどうかとそっと窺ったら、平然としている。強い。

「私は孫の顔が見たいんだ。できれば、最初は孫娘がいい。おじいちゃまと結婚するの、と言われないんだ。だから、一日も早く子供を作りなさい」

強く言い論じてくる八雲会長に、揃って笑みを浮かべる。作り笑顔です。

千尋さんと私は契約結婚なので、会長の孫が生まれることはないと思う。

「結婚となれば、ここでゆっくり静養というわけにもいかないな。急いで、瑠依さんをおまえの部屋に迎えなさい。必要な手配は……」

すぐにも動き始めそうな八雲会長の言葉を千尋さんが遮った。

「親父、瑠依にも都合がある。退職の手続きや引越とか。少しは常識で考えたらどうだ」

会長には申し訳ないが、千尋さんが正しいです。全面的に私の台詞をパクッてるけど。

「そういうことなら、おまえの職場復帰は、瑠依さんの引越し完了後になるな」

「……瑠依。今すぐ荷物をまとめろ」

苛立った声で千尋さんが私に命じたところで、苑子さんの優しくも厳しい声が飛ぶ。

「奥様になる方に、そんな言葉遣いはいけません。夫婦とは対等なのですよ、坊ちゃま」

苑子さんには弱いのか、千尋さんはやや間を置いて言い直した。

「……帰る支度をしておいてくれ。あとで迎えに行く」

少しだけやわらかい言い方に直ったので驚いた。更に「迎えに行く」がプラスされている。千尋さんにとって、苑子さんの言葉は絶対らしい。

「ふむ。相変わらずおまえは苑子には弱いな」

「うるさく」

——思いのほか簡単に結婚を許可されたことにほっとする。

にこにこしている八雲会長と苑子さんに挨拶をして、部屋を出た。……そして、二人同時に大きく息を吐き——第一関門突破に胸を撫で下ろすのだった。

少ない荷物をまとめ終えたとほぼ同時に、部屋のドアがノックされる。

「はく」

ドアを開けると、千尋さんが立っていた。私のバッグを見て、少し首を傾げる。

「荷物は、それだけか？」

「ええ」

仕事終わりに面接に来たのだから、荷物といっても通勤用のバッグだけだ。そう言う千尋さんは、手ぶらである。

「千尋さんのお荷物は？」

「スマホと財布と車の鍵があればいい」

ここは千尋さんにとっては別荘だから、着替えその他はいつも置いてあるらしい。

「それから、溜依」

「はい」

「俺に敬語はやめろ。正確にはやめてくれ。私生活まで敬語を使われるのは疲れる」

仮にも夫婦になるんだから、と言われたけど、仮の夫婦だからこそ線引きは必要だと思う。

「契約結婚なのには？」

「仕事の同期だと思えばいい。上司でも先輩でもなく、同期」

「その設定だと、私は社会人三年目ですから、千尋さんは二浪あるいは浪人と留年をしていることになります」

「そこまで細かく設定しなくてもいいだろ」

千尋さんはふっと小さく笑った。

この人、口調や態度は俺様だけ——何だかんだで、私の希望を受け入れてくれたり、配慮してくれたりする。

「……何だ？」

「俺様系かと思ったら、実は優しい人なのかなあと」

そう言ったら、千尋さんは私を眺めて、嘆息した。

「おまえ、本当に騙されやすいタイプだな……もう少し人の裏側を勉強しろ」

「でも千尋さん、今は素ですよ。さっきの、苑子さんへの態度も」

「否定はしない。結婚する以上、おまえ相手に表面を取り繕うつもりはないしな」

大きな会社の社長でもあるのに、千尋さんは私の遠慮のない物言いにも怒らない。

ほぼ初対面ながら、私にとって、千尋さんはとても話しやすい人だった。

「とりあえずは、おまえの家まで送る。俺が必要な手続きはあるか？」

「引越しと退職ですから、特にありません——あ」

言葉を途切れさせた私に、千尋さんは玄関へ歩きながら先を促してきた。

「敬語はやめると言いましたが」

「千尋さんこそ敬語はやめてください、致命的に似合ってます。……私の家具や荷物って、どのくらい運んでもいい……の？」

明らかに肩書きも年齢も上の男性相手に、敬語を使わないというのはなかなか難しい。

「好きだけ持ち込んでいいぞ。部屋は余ってる」

「……部屋が余ってる……一度は言ってみたい台詞……」  
「ちなみに金も余ってる」

「それは不用意に口にはいけない台詞です！」

思わず突っ込んだ私に、千尋さんは声を立てて笑った。

——こうして、私と千尋さんの結婚生活が始まった。

恋も愛もないけれど、打算と利益共有はある『契約結婚』が。

2

アパートに戻った私は、早速派遣会社に連絡して退職の意志を伝えた。

残りの契約日数は、引き継ぎの為の出社を残してすべて有休消化にしてもらう。そして、派遣会社には家庭の事情ということで、一旦求職登録を停止してもらった。

続いてアパートの退去についてだけど、これは引越しの日が決まってからの方がいいだろう。

そう思った私は、千尋さんに電話して今後の予定を立てることにした。

有休消化に入ったら引越準備をしつつ、祖母の退院と介護ホームへの入居手続きについて確認する。それから千尋さんと一緒に婚姻届を出しに行つて、週末にはアパートの解約手続きと彼の家へ引越す予定となった。

かなり過密スケジュールだけど、千尋さんは来週にはどうしても出社したいらしい。その為、今週中に入籍と引越しまで終わらせたいそうで、引越し会社の最大の繁忙期にあつさりと業者を確保してしまった。

更新しただけだから違約金はなく、敷金の一部も戻ってくる。よかった。

まあ、解約手続き中に私の姓が変わったら、また別の手続きが必要になりそうだし、スムーズにいくならありがたいことである。

そんなわけで、一気に埋まったスケジュールアプリを確認し、私は最後の出社に向かった。

水曜日のお昼休み、休憩室で一緒になった奈津美に声をかけられた。

「溜依。今日でラストってほんと？」

奈津美には『水曜日で出社終わり』と簡単に連絡していた。

「うん、本当」

「次、決まったの？」

「うん。何とかね……今日、引き継ぎしたら、あとは有休消化に充てる。足りない分は、欠勤扱いになるけど」

次といっても、就職ではなく契約結婚だけれども。

詳しく言えない私に、奈津美は嬉しそうに「よかったね」と言ってくれた。

「あたしは結局、実家に帰ることに決めたわ。面接のときの条件があんまりよくなってさ、こっち

から断っちゃった」

「そうなの？」

「うん。これからは農業に励むわ。……ただ、田舎に帰ると、結婚結婚ってうるさくなるのね……」

奈津美は苦笑しているけど、私は『結婚』という言葉に挙動不審にならないよう努めた。

「ま、瑠依も次が決まったならよかったよ。心配してたんだ」

「ありがとう」

奈津美には結婚のことを話しておくべきか迷ったものの、詳しく説明できない以上、黙っていた方がいいと判断した。

でも、心から心配してくれていたのが伝わってくるだけに、少し心苦しくなる。

「これからも東京には遊びに来るつもりだから、その時は連絡していい？」

「もちろん。——あ、でも次のところはスケジュールが不規則っぽい。先に連絡してくれたら、予定を空けるよ」

派遣でたまたま一緒になった縁だけど、奈津美は大切な友人だ。ここでお別れじゃなく、また会いたいと思っている。

「絶対だからね、瑠依。ついでに、次の職場でいい人見つけたら教えてね」

私は曖昧に笑って返答を誤魔化した。

仕事の引き継ぎは問題なく終わり、最後のタイムカードを押した。

一応、「お世話になりました」と関係者に簡単な挨拶を済ませてオフィスを出る。

家に向かいながら私は小さく自問した。

「……千尋さんに、報告した方がいいのかな……」

でも、日曜日までのスケジュールはすでに打ち合わせてある。

改めて知らせることもないだろう、そう思ったタイピングで、スマホが着信を告げた。

バッグから取り出すと、そこには登録したばかりの『千尋さん』という名前が表示されている。

「……はい」

『今、どこにいる？』

『会社の近く……だけど』

『そこからなら……アウーラホテルのラウンジで待ってる』

「え、どうして」

アウーラホテルは、私のような一般人には縁のない五つ星の一流ホテルだ。そんなところに、この一般OLファクションで入れというのだろうか。

『俺とおまえは、近々入籍予定だよな？』

『そうですね』

事実なので否定はしない。すると、千尋さんは私の予定を確認してきた。

『明日はおまえ、ばーさまの入院先に行くんだろ？』

「はい」

『増依。言葉遣い』

「……うん。行く」

面倒くさいな、この人は！ ちよつと丁寧語が混じるくらいスルーしてほしい。

『その前に、直接細かい点について話し合っておきたい。でない、と、ばーさまに結婚のいきさつを聞かれても上手く対処できないからな』

「……は？」

……何を言ってるのかな、千尋さんは。

『夕食のついでに打ち合わせするぞ。おまえ、好き嫌いやアレルギーはあるか？』

どんだん話を進めていく千尋さんの言葉を、私は慌てて遮った。

「あの、まさか……祖母の入院先に……ついて来るつもり……とか？」

『もちろん。入籍する前におまえの家族に挨拶するのは当然だろう。——そういうわけだから、ホテルのラウンジで待つてろ』

そう言つて、こちらの返事を待たずに一方的に切られた。

「……やつぱり、あの人俺様系だわ！」

それでいて、入籍の前に家族に挨拶するとか言つてくる。千尋さんの思考回路はまったくわからない。

元々、生活環境が違いすぎる相手だ。

私はこれから始まる同居生活が、少し不安になるのだった……

アウーラホテルのティールラウンジで待つっていると、すぐに千尋さんがやつて来た。しかし、私の格好を見るなり、有無を言わずハイブランドショップへ連れて行った。

抗議しようとする私を、『契約の一環だ』という一言で黙らせて。

いくつかのブランドを回り、店員さんを選んでもらった服を次々と試着していく。

素直に渡されたものを試着する私を、千尋さんが不思議そうな顔で眺めていた。

一通りの買い物を終えた私達は、千尋さんが予約していたレストランに来ている。

正直、個室なのありがたい。

洋食の作法は、カトラリーは外側から順に使う、くらいの知識しかない。今のところ注意されていないから、間違つてはいないようだ。

内心ほつとしてしていると、千尋さんが話しかけてきた。

「おまえ、動じなかったな」

「動じない？」

「いきなり着替えさせられても怒らなかつたし、ショップでも物怖じしてなかつたなど」

千尋さんの言葉に、私は納得して頷いた。

「確かに初めての経験でしたけど……『契約の一環』と言つたのは千尋さんです。……あ、これおいしいですね」

前菜の、蟹とムール貝の冷製ムースは蕩けるようになめらかだった。最初に出てきたアミューズ——キャビアを使った一口タルトもおいしかった。

「気に入ったなら、これも食べろ」

そう言って、千尋さんが自分の分の前菜をくれた。マナー違反かもしれないけど、お礼を言って受け取った。食欲旺盛うちはせいですみません。

出会ってまだ数日だけど、千尋さんとの会話は変に気を遣わなくていいから、とても楽だ。

私は目の前に座る千尋さんを見る。

さらりとした黒い髪、切れ長の瞳、すっと通った鼻梁びりょうと少し薄い唇。それが奇跡のようなバランスで配置された顔は、神様に贖ひいきされているとしか思えない。

まるで人に觀賞され、絶賛される為に存在するような美貌だ。

そんな人と、会ったその日に契約とはいえ結婚を決めるなんて、我ながら驚いてしまう。

何より、そのことを後悔していない自分にびっくりだ。

「……いずれ、それなりに外見も整えさせられると思っていましたから。私の普段の格好じゃ、千尋さんとは釣り合わないし」

「釣り合わなくてはいいだろ」

それを本気で言っているから怖い。

あえてお値段を気にしないようにしていたけれど、さっき買ったワンピースと靴とバッグは、それぞれ軽く私の月収の上をいっていた。

でも千尋さんにとっては、この値段の服は『普通』なのだろう。

「じゃあ、スーツが上下九千八百円で買えるって言ったら信じます？」

「——それは、使い捨てか？」

伶俐れいれいな美貌に、明らかな驚愕きょうわくが浮かんだ。その表情を、可愛い、と思ってしまう。

「もちろん、クリーニングに出して、使い回すんですよ」

「一度着てみたい気もするな……」

美形は着るものを選ばないと言うし、千尋さんならお徳用スーツもオーダーメイドスーツに見えるだろう。

「千尋さんさえよければ、今度は私が行くようなお店に付き合ってください」

「行く」

何だか楽しそうに千尋さんが即答する。そんな彼に、私はもっともらしく注意を口にした。

「その時は私がお金を出すので、千尋さんはお財布を出しちゃ駄目ですよ」

「女に払わせるのは……」

「男女平等。私も今日は甘えますから、次は千尋さんが甘える番です」

それが『対等な契約関係』だと言った私に、彼はそんなものかと頷いてくれた。

そして祖母に会うなら、私達の結婚が契約だとバレないようにお願いした。結婚の理由はお任せする。

——突然の夕食……デート？ は思ったより楽しかった。

千尋さんの愛車でアパートまで送ってもらい、お礼を言って別れた。契約で結婚なんて、と思っていたけれど、千尋さんは優しい。彼となら、それなりに上手くやっていけるのではないかと思えた。

明日は祖母に会いに行く。

……おばあちゃん、千尋さんを連れて行ったら驚くだろうなあ……

翌日の午前十時。

アパートの階段を下りたら、千尋さんの車がすでに停まっていた。

あの超高級車は、日常生活にはかなり不向きだと思う。

「おはようございます」

助手席のドアを開けて挨拶してから、車に乗り込む。千尋さんは、昨日より落ち着いた雰囲気のスーツを着ていた。

「……はよ」

ちよつと眠そうな千尋さんに、私は首を傾げる。

「もしかして……昨日、お酒とか飲みました？」

「飲んだ。日付が変わる前にやめたから、アルコールは残ってない」

そう言いながら、あくびをかみ殺す千尋さん。とはいえ、免許は持っけていてもペーパードライバーの私には、運転を代わってあげることができない。

「……緊張して寝つけなかったんだよ」

私の視線に気づいた彼は、深い息を吐いて寝不足の理由を教えてくださいました。

「おまえも、親父と面接する時は緊張しただろう」

「それは、まあ」

今後の生活がかかっていたわけだし。

「俺だつて同じだ。おまえのばーさまに反対されたら、この契約自体が駄目になるんだからな」俺様な彼にしては、ずいぶんと弱気な発言で驚いた。

「——どうせなら、悪印象より、好感を持つてほしいだろう。孫娘を嫁にもらいたいんだから」ぼつりと零して、千尋さんは車を発進させた。

お互い必要に駆られての契約結婚なのに、彼は祖母に誠意を尽くそうとしてくれる。

そんなことを言われたら、こちらの調子が狂ってしまう。

何とも言えない落ち着かない気分で、私は窓の外を眺めた。

祖母が入院している病院は、都心から少し離れた静かな街にある。

リハビリ病棟の大部屋に行くと、祖母がベッドの上で身を起こして待っていた。

「溜依ちゃん」

私を見つけてほっこり笑う祖母は、前にお見舞いに来た時よりずっと元気そうに見える。

そのことに安心して、私は笑顔でベッドへ歩み寄った。

祖母は私の手を支えに、杖を突いてゆっくり立ち上がる。前に来た時は、車椅子だったことを思えば、杖が必要とはいえ自分で歩けるくらいに回復していることに安堵する。

今日はこれから、ソーシャルワーカーさんと一緒に今後について面談することになっていた。

「ごめんね、瑠依ちゃん。迷惑かけるね」

「そんなことないよ。面談が終わったなら、そのまま施設の入居日を決めるつもりだけど、おばあちゃんは、それでいい？」

「うん。でも……瑠依ちゃん。聞いた話じゃ、あたしにはもつたいような場所だよ」

お金もかかるだろうと心配そうな祖母に、私は笑ってみせた。

「大丈夫。——ほら、行こう？」

同室の患者さん達に挨拶をして、祖母を支えてゆっくり部屋の外へ出る。面会用の明るいテラスルームまで行くと、千尋さんが珍しそうに周りを見ていた。

「千尋さん」

声をかけると、彼がこちらに近づいてくる。

綺麗な顔立ちがいつもより冷たく見えるのは、緊張の為だろう。

……だけど——おばあちゃんが硬直しているから、少しでも笑ってもらえないだろうか。

「……瑠依ちゃん？」

明らかに場違いなセレブオーラを纏っている千尋さんを見て、祖母が困惑した声で私を呼んだ。

「えっと……今、お付き合いしている人。結婚するつもり。あのね、おばあちゃんの入る施設の手

配は彼がしてくれたの」

嘘は言っていない、嘘は。

昨日デートしたから『お付き合い』していることにはなるはずだし、結婚だつて恋愛結婚じゃないだけ。それに、ホームの手配してくれたのは間違いなく千尋さんだ。

「八雲千尋と申します。ご挨拶が遅くなつてすみません。……瑠依さんとは、結婚を前提にお付き合いさせていただいております」

絵に描いたような美形が、これまたマナーのお手本のようにきれいなお辞儀をした。

祖母はぼかんとして千尋さんを見つめ——私を振り返ってくる。

「まさか、あたしの為に、瑠依ちゃん、結婚するのかい？」

「そうですね」

私が否定するより先に、千尋さんが頷いてしまった。

「千尋さん!？」

「瑠依さんがおばあさまをとでも心配していて、結婚はできないと言うので——設備の整ったケアホームを用意するから、結婚してほしいとお願いました」

「瑠依ちゃん……」

「ち、違う——違うけれど、違うから!」

おばあちゃんの為に人生かけちゃったのだからって顔しないで! 確かにかけちゃったけど、後悔はしていない——契約だとは、絶対に言えないけど。